

宮部みゆき

黒武
御神火
御殿

くろたけ
ごじんかごてん

三島屋変調百物語六之続

毎日新聞出版

目次

序

第一話 泣きぼくろ

7

第二話 姑の墓

93

第三話 同行二人

171

第四話 黒武御神火御殿

259

序

江戸は神田三島町にある袋物屋の三島屋は、一風変わった百物語を続けている。

百物語と言えば、一つの場所に人びとが集い、夜を徹して怪談話を語り合う——という形式の、娯楽でもあり、世間知や教養を身につける社交の場でもある。その手順もおおかた定められている。

語りを始める前に百本の蠟燭ろうそくを灯しておいて、一話終わるごとに一本ずつ消してゆく。話が進むほどに場はだんだん暗くなり、ついに百話に達すれば暗闇に包まれて、そのなかで真の怪異が起ると言われている。

三島屋の変わり百物語では、お店の奥の「黒白の間」という座敷に一度に一人、または一組の語り手を招き、差し向かいで耳を傾ける聞き手も一人である。そこで語られた話はけっして外には漏らされず、

「語って語り捨て、聞いて聞き捨て」

これをもっとも大切な決め事としている。

ここ三年、多くの語り手が黒白の間を訪れ、怪異と不思議を語ってきた。それは身の上話だったり、罪の告白だったり、懐かしい思い出語りだったり様々で、語り手の声音もまた十人十色。その都度、黒白の間に流れるひとときを多彩な色に染めてきた。

そもそもは三島屋の主人・伊兵衛の思いつきで始まったこの変わり百物語だが、第一話から聞き手を務めてきた姫のおちかが、この春めでたく嫁にいったので、次なる聞き手は伊兵衛の次男・富次郎に替わった。

商いの修業に出ていた先で喧嘩に巻き込まれ、大怪我をして生家に戻ってきたこの次男坊は、身体は癒えたけれど、まだいくらか両親を心配させていて、それなら当面はぶらぶら暮らしをするのも親孝行のうち。呑気に臍すねをかじるついでに、この聞き手を志願したのである。

気さくで気がよく旨い物好き、跡取りではないから「小旦那」と自称する富次郎。おちかが聞き手だったところに、ふとした縁の導きがあつて三島屋に入り、百物語の守り役となつたお勝かつ。富次郎が幼いころから三島屋に奉公してきた古参の女中、おしま。

この三人で語り手を迎え、新たな変わり百物語の幕が開く。

第一話

泣きぼくろ

変わり百物語の始めから、語り手の周旋は、灯庵とうあんという口入屋の老人に頼んできた。

おちかからも、三島屋の奉公人たちからも、こっそり「蝦蟇がま仙人」と呼ばれ、憎まれるほどではないがそこそこ嫌われ、嫌がられるほどではないがなかなか億劫おつうがられていたこの老人は、ただ語り手を選んで送り込んでくるだけでなく、たまに自分から三島屋を訪おとうことがあつた。

この「たまに」の案配が、三島屋の側からは計りかねた。蝦蟇仙人にとつては、どんな用件が、自ら御神輿おみこしをあげて来るほど重要なことになるのか。

たとえば、二年ほど前に三島屋が押し込みに遭つたとき。去年の冬の初め、神田川のすぐ北側の神田松永町で夜火事があり、季節柄の乾いた北風のせいでも、三島屋の人びとも肝を冷やしたとき。どちらのときも、灯庵老人のところからは、年配の番頭が「お見舞いを申し上げます」と顔を見せただけだつた。

たとえば、つい一月ほど前、おちかが多町二丁目の貸本屋・瓢箪古堂ひょうたんこどうの若主人、勘一かんいちと祝言を挙げたとき。大きな祝い事だが、かの口入屋からはござっぱりした若い衆が一人でやつて来て、「おめでとつございます」と角樽つのたるを置いていっただけである。

けち臭いと言いたいわけではない。挨拶あいさつが足りぬと難癖をつけたいわけでもない。ただ、こういうめつたにない災難や慶事には素っ気なくせに、さしたる用もなしに気まぐれに訪ねてきては、伊兵衛やおちかにけっこうな時を潰させてきたこの口入屋の気が知れないと思うだけである。そんな次第だから、変わり百物語の後継ぎになつたとき、富次郎は覚悟した。

——何か言いに来るよ、あの蝦蟇仙人は。

おちかには、顔を合わせるたびに「ぐずぐずしてたらあつという間に嫁いき遅れになる」とか、「気が利かない」とか「器量よしでも気が強くては三文安だ」とか、ちくちく嫌味を言っていたという。ならば富次郎に対しても、言いそうなことの見当は容易につく。

「穀潰し」「すねかじり」「道楽息子」

まあ、笑ってかわしてやろうと待ち構えていたら、案の定、春の好日にやって来た。結城紬つじぎに御所絹の一つ紋の羽織を合わせ、禿はげ上がった頭との境目がわからない額に、水が溜たまりそうなほど深い皺しわを刻んで。

「次の語り手のことでご相談がありましたな」

ダミ声でそう言って、灯庵老人は、いつものように伊兵衛の居間へ通された。用件が変わり百物語のことなら、おっつけ自分が呼ばれるだろうと富次郎も軽く支度にかかったら、丁稚でうぢの新太が茶菓を運んで行こうとする。

「え、おまえさんが行くの？」

おしまではないのかと問うと、新太は情けなさそうに眉毛を下げた。

「おいらがくじ引きで負けたんです」

よっぽどだね、みんな。

「おおい、富次郎。ちよつとおいで」

伊兵衛の声に、富次郎が居間へ顔を出すと、口入屋の嫌味老人は伊兵衛と向き合って、置物のようにどっかりと座を占めていた。そういえば誰もこの人の歳を正しく知らないのだが、かなり

の高齢であるはずなのに、ちつとも縮んで見えない。大柄だとか骨太だからとか、そういう体格の云々うんげんではなく、身にまとっている雰囲気がかいというか、分厚いというか。

——つまりは図々しいんだよな。

ひそかに思っているよ、

「おちかの後継ぎの聞き手としては、これが初顔合わせだね」

伊兵衛だけはこの口入屋が苦手ではないらしく、ほがらかに言う。

「灯庵さん、あらためまして、これがうちの次男の富次郎ですよ」

型どおりの挨拶をかわして、

「それじゃ富次郎、今後のことをよく相談しておくれ」

置き去りにされて富次郎、蝦蟇仙人と対決の巻である。

「相変わらず、三島屋さんは景気がおよろしくっておめでたい」

煙草のヤニが絡んだようながらがら声で、まずあちらから一太刀。

「はい、おかげさまで商売繁盛、ありがたいことでございます」

受けてにっこり、富次郎。

「越川えしかわさんでも丸角まるかくさんでも、さすがに、虫に銚子縮ちぢみを着せてはおらんだろうからね」

越川も丸角も、江戸市中で名高い袋物屋の名店である。伊兵衛は三島屋を興すとき、いつかはこの二店とお客を争ってやろう——という気概を胸に抱き、ずっと商いに励んできた。今や三島屋は第三の名店で、越川・丸角の手強い商売敵になっている。

しかし、この台詞はどういう意味だ。

「虫に銚子縮を着せる？」

言つて、富次郎は自分の胸元を見おろした。確かに、銚子縮の紺縮こんじまの小袖を着ている。

気楽な立場の富次郎だが、毎日遊んでいるわけではない。店先でお客様に應對したり、仕事場とのあいだを行き来して品物を運んだり、折々に商いを手伝っている。主人の倅せがれだから、粗末な恰好をするわけにはいかない。銚子縮は値が高く、地味だが一見してそれとわかる品ひんがあるので、ちようどいいのだ。伊兵衛もしばしばこれを着ている。

「——虫というのは、わたしのことですか」

富次郎は自分の鼻の頭をさして問うた。

灯庵老人はむつとりとうなずく。

「他に誰がいますかね」

「わたしが、虫」

呟いて、やつと富次郎はびんと来た。

「金食い虫？」

灯庵老人はフンと言った。「米食い虫のつもりで言ったんだが、それでもいいね」

富次郎はつくづくと蝦蟇仙人の顔を見た。なるほど、そう来たか。

「米ばかりじゃなく、わたしは蕎麦も小豆も食いますからね。ああ、栗餅あわも好きですよ。本石町の菓子屋（いしかわ）は、そりやもう口当たりのいい栗餅を売り物にしています。雲を嚙かむように柔らかくつて、ほんのり甘じょっぱくて、絶妙ですよ。今度、茶請けにお出ししましょう」

富次郎は旨い物が好き、なかでも甘い物に目がない。食べ歩きもするし、読み売りや評判記に

こまめに目を通してている。

「ちなみに、去年のわたしの市中甘い物番付を申しますと——」

「ああ、もういいよ」

灯庵老人はうるさそうに手を振った。その掌てのひらは痩せて骨張っており、体格や雰囲気とは裏腹に、蝦蟇仙人の歳を映している。

まずはこちらが一本とれたようだ。

「変わり百物語のご用がおりと伺いましたが」

二本目も先に打ち込んでみる。灯庵老人は、不機嫌な表情はそのままに、しつこり固そうな目玉だけをぐりと動かして、富次郎を値踏みした。

「あなたさんが聞き手を引き継ぐというのは、本当の話ですか」

人の周旋を頼んでいるお客様の側を、「あなたさん」とは偉そうな。

「本当ですよ」

富次郎は愛想よく応じた。

「灯庵さんに比べたら世間知らずの若造ですが、ひととおりの礼儀は心得ております。粗相のないよう聞き手を務めつつ、人生修業を積んでいこうと思っております」

灯庵老人は、ちっこい目で斜交すかいに富次郎を睨にらんだ。

「人生修業ねえ……」

「いけませんか。おちかは、この百物語を通してずいぶんと学んだようでしたが」

「あなたさんが学ぶべきは、商いのことじゃありませんかね」

「もちろん、商いのことは父母ちちうはから学んでおります。で、ご用件は」

蝦蟇仙人の額にも鼻筋にも、不機嫌の油がじんわりと滲じみ出でくる。この油を搾しぼったら万病に効く薬ができるのかいなと、富次郎は腹のなかで茶化してみた。

「私はね、案じておるんですよ」

と、灯庵老人は言い出した。ダミ声がいっそう低く、凄みを帯びている。

「おちかさんは嫁入り前の娘だったから、私が選りに選った語り手の話を聞いて、世間知に通じ、来客あしらいを覚えることが、確かにためになりましたわな。けども、あんたさんはぶらぶら息子じゃ」

「ぶらぶら息子だからこそ、婚入りの良縁に備えて、世間知を身につけて来客あしらいを覚えることが、おちかと同じようにためには思われませんか」

蝦蟇仙人の口元がよじれたようになった。

「あんたさんは面白がつとる」

「面白がつてはいけませんか」

「他人の話を聞くことを軽く見とる」

「では、軽く見ないように用心します」

実際、そんなことぐらいい、蝦蟇仙人に忠告されなくなつて、こちとら既に痛い目に遭い、ちゃんと骨身に応えているのだ。

とりわけ無惨な話を聞いた後、聞き取った出来事おきが澁しぶのように心に淀んで、自分が変わつてしまったような気がしたことがある。そのとき、おちかが励あきらましてくれたのだ。

——大丈夫、ちゃんと聞き捨てにできてますよ。

富次郎は子供のころから絵心があつた。そして三島屋を離れているあいだに、奉公先で本物の絵師につく機会がちよつとあり、筆の使い方、土台になる技術、素材のつかみ方などを習うこともできた。

だから今も、素人の手すさびではあるが、よく墨絵を描く。変わり百物語を聞くようになってからは、一話ごとに、その話を材にして一枚の絵を描くようになった。

その絵ももちろん、外には出さない。あくまでも富次郎の心を調えるために描いたら、専用の桐箱にしまつて、お勝に預けている。ついでに言えば、その桐箱の名前は〈あやかし草紙〉だ。

「実はわたしも、いい折なので、灯庵さんに伺うかがいたいことがあるんです」

煙で燻いぶされた蝦蟇のようなご面相に向き合い、富次郎はきりりと切り出した。

「うちの変わり百物語が評判になつて、あなたのお店には、語り手志願の方々が列をなしているそうですね。それは本当に有り難いことですし、お世話をおかけしております」

軽く頭を下げてから、

「今さつき、おちかのために語り手を選りに選つたとおっしゃいましたが、いつもどんなことを抛なり所ところに選えらんでいたのでしょうか」

その人の人相風体か。身元か。

「語り手は、百物語の場では、本当の身分や名前を伏せていい。その方が語りやすいですからね。でも灯庵さんには、ちゃんと身元を言うのでしょうか。やっぱり、それがいちばんの抛なり所ところですかね。それともほかに、人を見分ける勘所かんじがありますか」

唸るようにため息をつくとき、灯庵老人は不機嫌を剥き出しにして言った。

「そんなことは、あんたさんが口入屋になるんでなければ教えられない」
ほほう。

「口入屋秘帖だと」

「そういうことをけるっと口に出すところが面白がっているんですよ」

「あいすみません」

蝦蟇仙人が洪面のままなので、富次郎は一人で明るく笑った。

実を言えば、おちかが嫁ぐまで最近の幾度かは、富次郎も一緒に語り手の話を聞いていた。最初は次の間に隠れていたのだけれど、ちょっとしたきつかけで自分から黒白の間に踏み込んでしまい、それならということ、おちかの隣に座るようになったのである。だからこそ、話が後を引いてしまって、不安な思いも味わったのだ。

それでも、変わり百物語は面白かった。おちかに比べれば世間が広いつもり富次郎だったけれど、知らないことはまだまだあった。

聞き手の後継ぎになることに迷いはない。白状すれば、おちかの祝言のときに一つ薄気味悪いことがあって、そのときだけはしばし心が揺れた。でも、守り役のお勝がついてくれるのだし、おちかが乗り越えてきたことに、従兄の自分が臆してしまうのは情けないと思ったら、その揺れも吹っ切れた。

「わたしはもう、明日にでも新しい語り手を周旋していただきたいんです。よろしくお願いいたします」

富次郎が膝の上で手を揃えると、灯庵老人は長々と鼻息を吐き出して、

「嘘つきには用心します」

千切って捨てるようにそう言った。

「は？」

「語り手を選ぶときの勘所ですよ。あんたさんが今お訊ねになったんでしようが」

ああ、それが答えなのか。

「語り手志願のお方が嘘をついていたら、選ばないと」

「いや、こちらさんで嘘を語りそうなお人だと察したら」

苛立たしげに頭を振って、

「小さな嘘じゃあない。ホラ話をしそうなお人は除いたという意味ですよ」

三島屋の変わり百物語が評判になってきてからは、とりわけ用心したという。

「嘘をついても、ホラを吹いても、何とかして評判の物事に関わりたいという野次馬は、どこにでもおりますからな」

富次郎は素朴に驚いた。「灯庵さんは、それを見分けられるんですか」
「見分けるのが口入屋の仕事です」



凄^{まじ}い。冷やかしゃ皮肉ではなく、その眼力は鋭い。

「これまでのところ、黒白の間で語り手がホラ話をしたことはありませんでした。灯庵さんが語り手を選んでくださったおかげだったんですね」

蝦蟇仙人は目を剝いた。

「なんであなたさんがそんなことを請け合えるんですかね」

「や、あはは、おちかの様子を見ていれば、それくらいわかりますよ」

自分も一緒に聞いていたことがあるなんて、このうるさい老人にはきつちり隠しておこう。露^ば見たら蝦蟇の祟^{たた}りがおっかないことになりそうである。

「——これからは存じませんよ」

また千切って投げつけるような言である。

「おちかさんは箱入り娘だったから、こつちも気を使つたんですわな。しかしあなたさんは一人前の男なんだから、騙^{だま}されようが転がされようが、傷にはなりません」

嘘やホラ話は、富次郎が自分で見分けろというわけだ。

「冷たいなあ」

富次郎はうなじを搔いてみせた。

「そんなら、せめて指南してくださいよ。語り手の嘘やホラ話を見分けるコツを」

「そんなもんはありやせん」

霞^{かすみ}を食う仙人ではなく、蝦蟇のお化けになりきってしまったみたいに、灯庵老人の顔はてらてらだ。

「あつたとしても、口先で教えられるわけがない。あなたさんは本当に人を舐^なめているね。ちつとは痛い目に遭うがいい」

あたら、青筋立ててるよ。

「まあ、わたしはおっしゃるとおりの米食い虫ですから、変わり百物語で語りに騙^{かた}られたとしても、三島屋の傷にもなりませんしね。あんまり難しく構えずに、聞き手を楽しみたいと思いません」

宥^{なだ}めたつもりの言葉も、かえってよくなかったらしい。灯庵老人はぷりぷり怒りながら帰っていった。

——まずかったかなあ。

反省するところもあつたので、富次郎はこのことをお勝に打ち明けた。すると、守り役の女中は鈴を転がすような声で笑った。

「灯庵さんを本気で怒らせるなんて、さすがは小旦那様ですわ」

「でもさ、あの人、意地になつちまって、これからはわざと嘘つきの語り手ばかり寄越すようになるかもしれないよ」

「それも面白うございますね」

お勝は言って、優しい目つきになった。

「たいていの人は、身に迫る急な理由^{わけ}がない限り、上手な嘘はつけないものです。大きな嘘をつくには大きな器量が要りますもの」

お勝もまた鋭いことを言う。

「ですから、もしも小旦那様が、あれつと裾払いを喰らうような大嘘つきに出会ったら、大人を見つけたと珍重いたしましたよ」

でも、その嘘の裏に切なる理由が隠れていそうに思えたなら、「その理由まで聞き出してみたらいかがでしょう。変わり百物語の聞き手冥利に尽きる仕事になるんじゃないませんか」

そうだねと、富次郎は強くうなずいた。

灯庵老人が意地になったかどうかはさておき、それからほどない春分の日、午後の八ツ時に、新しい語り手が三島屋に来ることになった。

支度のために、富次郎は、黒白の間の床の間に半紙を貼った軸を下げた。語り手が帰ったら、この半紙に、聞き終えたばかりの話の材にした墨絵を描くのだ。

掛け軸の下には、お勝が花を活けてくれた。黒漆塗りの丸い花器に、春竜胆と一人静を合わせている。

「花売りは、一人静と二人静の両方を持って来て、春竜胆にはどちらを合わせてもきれいだと勧めてくれたんですが」

一人静は一本の穂に可憐な白い小花をつける。二人静はこの穂が二本で、やはり白い小花が楚々としている。

「聞き手と語り手、二人が静かになってしまふのは何だか験が悪いので、一人静の方にいたしました」

活け花の仕上げをしながら艶然と微笑むお勝は、もう大年増ではあるが、黒髪豊かな柳腰の美女である。ただ、その顔と身体の広い部分があばた（痘痕）に覆われている。

疱瘡は命に関わる恐ろしい疫病だが、あとに残るあばたも、とりわけ女の身には恐ろしいものだ。お勝もあばたのせいで辛く寂しい身の上となったのだが、一方、強い疫神である疱瘡神の加護を総身に帯びて、他の邪悪や禍事を遠ざけ払い落とす「禍祓い」の力を持つことにもなった。

三島屋では、日頃はおしまと同じ女中の一人として立ち働き、変わり百物語の聞き手を迎えるときだけは、守り役となって次の間に控える。そうやってずっとおちかか寄り添ってきてくれたこの女の人柄や、控え目にしていても折々に滲み出てくる教養のほどに、富次郎は感じ入ることがしばしばある。

「今日からは、お勝さんはわたしの守り役だ。どうぞよしなをお願いします」

お勝もその場で三つ指ついて、

「禍祓いとして守り役として、精限り根限りお仕えいたします」

凛とした声でそう言った。

姥子に結ったお勝の髪から、椿油がほんのり薫る。今は元通りになっているが、昨年の冬、木枯らしが吹き始めるころに迎えた語り手の話が残っていた「厄」で、一時は前髪ひとつかみ分が真っ白に変じ、引っ張ればずりりと抜けて凄まじかった。

語り手を迎えるとき、おちかかは毎回、何を着るか頭を悩ませていた。聞き手が華美な恰好はできないが、あんまり無造作では失礼になる。そのさじ加減が難しい。

その点、格別な伊達者でもない〈そのへんの男〉の富次郎は気楽である。あの銚子縮の紺縞の

小袖に博多帯を堅結びにして、伊兵衛の御納戸色の一つ紋の羽織を借りた。これは本式の晴れ着ではなく、伊兵衛が寄り合いや親しい商人仲間を訪ねるときに着るもので、紋のところ三島屋の屋号を刺繍してある。

無礼ではなく、重厚すぎず、見るからに贅沢ではないがきちんとしていて、聞き手にはちょうどいい。あっさり決まった。

むしろ難しいのは茶菓子の方だ。最初は、富次郎が季節に合わせて「この店のこれ」と決めたものを出してもらおうつもりだったのだが、干菓子はいいが生菓子は、店の都合でその日は作っていないとか、早々に売り切れてしまったなんてことがある。そこでおしまと相談し、「この店のこれ」を五番目まで書き並べておいて、おしまが首尾よく手配できたものを出してもらおうという形に落ち着いた。

だから富次郎にも、五つのうちのどれが来るかわからない。語り手の歳、男か女か、どんな身分か立場であるか、それによってその菓子が、口に合ったり合わなかったりもするだろう。語り手が菓子を喜び、心がほぐれてくれれば上出来だし、何だこれほとい顔をされなければ、語りの進みにも障ってしまいうだろう。

——どきどきするなあ。

嫁ぐおちかの前で胸を叩き、「あとわたしに任せておきな」と言ったあのときは、いざとなったらこんなに着かないものだとは思わなかった。

「小旦那様、黒白の間のお客様がお見えになりましたよ」

いよいよ、おしまがそう報せてくれたときには、気分をしゃっきりさせるために、富次郎は自

分の頬を両手でばんばんと張った。

男富次郎・二十二歳の初陣だからと、わざわざ様子を見に来た三島屋のおかみ、おふくる様のお民が笑う。

「気合を入れてお行き。いい人に会えたら、お見合いの手間がなくなる」

「嫌ですよ、おっかさん」

なんて切り返しはしたものの、花のような乙女が来てたらしいなという期待、いや下心はないでもなかったのだが——

「ようこそ三島屋の変わり百物語においでくださいました」

丁重に挨拶して頭を持ち上げるまでのあいだに、富次郎はその下心を片付けた。手習所の習子が厳しい師匠の目から書き損じを隠すように、たちまち、しつかり、跡形もなくしまいだ。

黒白の間の上座の座布団に、首を縮め指を組み合わせて行儀よく座っているのは、富次郎と同じくらいの年恰好の男である。富次郎よりは小柄で、銀杏つぶしの鬘をいただく顔もほっそりと小作りだ。

伊兵衛の名代として来客を迎える立場だから、富次郎は羽織を着ている。来る方はもつと気軽なので、紺のかすり縮の着流しである。小倉木綿の男帯を貝の口に結んでいるのもごく当たり前で、気取ったところはない。かぶき者でも遊び人でもなさそうだ。

小さな商家の倅か、そこそこの構えのお店の奉公人か。身なりだけでは、どちらとも判別がつきにくい。

「——三島屋の富次郎さん」

口を開いて、語り手はこう言った。

「やっぱり、手前の顔はお見忘れですか」

富次郎は面食らった。こういう始まり方は、まったく予期していなかった。

「先にごかでお会いしますかね」

つい身を乗り出して問い返すと、相手は小作りの顔をくしゃっと丸めるようにして笑う。

「先にごころか、ガキのころ」

そのしゅっとした笑み、ちんまり整った色白で小作りの顔。

あれ？ 何か見覚えがあるような。

語り手は自分の額をつるりとさする。

「神田佐久間町の子だくさんの豆腐屋の」

そこで富次郎も思い出した。

「お豆のはっちゃん！」

富次郎が思わず突きつけた指の先で、語り手は嬉しそうに笑み崩れた。

「そうそう、〈豆源〉の八太郎でござんすよ」

ええう！ ホントにはっちゃんかい？ 久しぶりだね、うん、富ちゃんも元気そうで何よりだ、

三島屋さんは凄いいねえ、市中で指折りの名店になったじゃないか、おかげさまで、親父とおふくろが気張ってきたからさ、おいらはずっと他店へ行って——

息せき切ってしゃべり合い、やあやあと座を離れて手を取り合っているところへ、おしまが茶

菓を運んできた。富次郎と語り手が、いきなり打ち解けているのでびっくりだ。

「お、甘い物が来たよ」

茶菓子は大福餅である。ぱっと見ただけではどこにもある大福だが、実は粒あんを上新粉で作ったしんこ餅と餅米の餅で二重にくるんであって、ぱくりと噛めば歯ごたえと口溶けが絶妙なのだ。富次郎が本日の茶菓子の三番目に挙げておいた「羽二重大福」である。

「おしまさん、この人は、わたしのガキのころの友達なんだ。佐久間町の豆腐屋のはっちゃんといったら覚えがないかい？」

いやいやと、八太郎が恐縮する。

「手前が富次郎さんと同じ手習所に通っていたのは七つのとき、一年足らずのことでした。おうちの方には遊びに行ったことがないし、女中さんは手前を覚えてないでしょう」

「そんなら、豆源の豆腐の味は？」

え、豆源ですかと、おしまもまた目をぱちくり。声がはしゃいだ。

「それなら覚えてますよ。揚げもおいしかったですよねえ」

黒白の間がこんなふうになるのは初めてである。

「なんて懐かしいんでしょう」

おしまの笑顔には、だが少しばかり気まずそうな色もある。それもそのはず、

「ごめんなさいね。今では神田川のこつちがわのお豆腐屋さんに頼りつきりなので、豆源さんとはお付き合いが切れてしまってます……。お店は繁盛しているんでしょう？」

そうなのか。富次郎は台所のことには疎いので、三島屋が今どこから豆腐を買っているのかな

んて知らないのだ。

「はっちゃんが手習所をよしちまったのは、確か養子に行ったからだよね？」

八太郎は座り直すと、両の腿ももの上に掌を置いて、うんとうなずいた。

「あの年、手前は八つになったばかりで養子に行つて、豆源は親父の遠縁に居抜きでそっくり渡しちまったんです。だから、今も佐久間町にあるお店は豆源違いなんです、どうぞお氣遣いなしにしてください」

富次郎もおしまも笑顔が固くなった。八太郎だけがほどけている。

「今の豆源は、うちの親父の豆源の味を十としたらば、三くらいの味です。三島屋さんがほかの豆腐屋をひいきにご贖ひきにしてよかったですよ」

「そうなのか……」

富次郎が覚えていた豆源は、とうの昔に失なくなっていたのだ。

「あのとき、うちの家族はばらばらになっちまったんだ。その経緯ゆゑがけっこう珍しいもんで、変わり百物語にはびつたりかなあつて、今日は寄せてもらつたんです」

そう、八太郎は語り手なのだ。おしまは我に返つたようになり、盆を抱えて出ていった。

「うちの変わり百物語ではね、聞き手はわたし一人なんだ」と、富次郎は言つた。

「聞いて聞き捨て、語つて語り捨てなんだよね？」

八太郎が言つて、またしゅつと笑う。

「それも評判だから、知つてたよ。聞き手を務めていたお嬢さんがお嫁に行つて、富ちゃんに替わつたつてことも、このあたりじゃとつくに噂になつてるし」

このあたりの噂が耳に届いたということは、今の八太郎はまた神田近辺にいるのだろうか。

「語りにくくなるようだったら、今の暮らしのことは伏せといていいんだけど」

富次郎の言いたいことを察したのか、八太郎は軽くかぶりを振つた。

「おいらは——じゃないや、手前は養子に行つた先からまた婿養子に出てさ、今は神田にいないんだ」

でも豆腐屋だよ、と言う。

「親譲りの家業だもん」

「そうかあ」

「このところ、もとの豆源で法事があつたりして、何度かこつちへ来ていてね。ちょうどいい折だから、三島屋さんの変わり百物語で語れたら」

懐かしい富次郎にも会えると思つた。

「お互いの都合がうまく合つてよかつた」

灯庵老人が、何を思つて八太郎を選んで寄越したのか知らないが、富次郎は嬉うれしい。

「富ちゃんの兄さん、一郎さんだっけ」

「伊一郎」

「今、三島屋さんにはいないの？」

「商いの修業に出てるんだ」

すると八太郎はほつとしたような顔をした。「そんなら、会つちまう氣遣いはないよね。富ちゃんの兄さんは、十四年前、うちのゴタゴタがあつたころ——やつぱり近所じゃ噂になつたから

さ、何かしら耳に入って、察していたらと思うんだ」
今でも会ったら恥ずかしいと、八太郎は言うのだった。

旨い豆腐を作るお店を居抜きで明け渡し、家族がばらばらになるような出来事が、恥ずかしい？

「十四年前は、うちの兄貴だって十かそこらのガキだったけど」

「十なら、察しがつくようなゴタゴタではあったんだよ」

言って、小さく形の整った鼻をつまむようにして、八太郎は目を伏せた。

「おいら——じゃないや、手前は」

「おいらでいいよ。わたしもおいらでいくからさ」

二人で笑った。

「おいらはあのころ、歳は七つから八つ。揉め事が始まってからケリがつくまで半年ぐらい。うちのなかで何が起こってるのか、ほとんどわからなかったんだ。でも、すぐ上の姉ちゃんは、何から何までわかってたって」

女の子はおませだからね、と言う。

富次郎は考えた。「おませという言葉が出てくるような類いの揉め事だったんだね」

八太郎はうなずく。「だから、見ようによっちゃ笑い話さ。おいらも今なら笑えるよ」

だが、その顔は大真面目だ。

「おいらね、一昨年女房をもらったときにも、自分ちで昔起こったことを思い出して、ああって膝を打つ感じになったんだけどね」

でもね、と笑顔になって、

「父ちゃんになつたらさ」

「おお、そりやめでたい！」

赤子は女の子だという。

「生まれたばかりの赤ん坊を抱っこして、ああ、おいらも親になったんだって思ったら、今度こそ、昔のゴタゴタがどんなに大変なことだったのかって、もう砂地に水がしみこむみたいにすうっとわかった」

そしたら背中が寒くなった。

気持ち悪くて吐きそうになった。

「恥ずかしくてみっともなくて、あのころ、近所の人たちが、うちをどんな目で見てたろうって思ったら死にたくなった」

八太郎の言を聞くうちに、富次郎も背中がぞわぞわしてきた。

「そういうの、みんな吐き出したくなっちゃったんだ。いてもたってもいられなくて。だけど、うちの兄ちゃん姉ちゃんたちは」

——今さら思い出させないでくれよ。

——もう忘れたよ。くわばら、くわばら。

「それで、三島屋の変わり百物語の評判を思い出したんだ」

富次郎のなかでは、聞き手としてよりも幼友達としての野次馬心が膨れてゆく。

「よし、いいよ。どんと来い。すっかり吐き出して語っておくれ。おいらが聞き捨てるからさ」

我ながら凜々しい感じで言い放つたら、八太郎はほっと安堵したように笑みを咲かせて、また鼻をつまんで下を向く。

「えっと……どこから語ればいいかなあ」

しばらく考えて、切り出せない。

「そんなら、まず豆源の人たちを紹介してくれよ」と、富次郎は言った。「おいらも、はっちゃん家が子だくさんだったことは覚えてるけど、一人一人の顔と名前まではおぼつかねえからさ」

「名前かあ」

うっと詰まる様子なのは、「死にたくなるほど」恥ずかしい話だからである。

「ごめん、いっぺんに名前を聞いても覚え切れねえや。歳と、はっちゃんとの繋がりだけ聞いた方が確実だ。手元に書き留めていいかい？」

黒白の間の片隅には、富次郎が日ごろ使っている文机が寄せてある。それを動かしてきて、文箱を開けて半紙を広げ、墨壺から小皿に墨汁を注いだ。

「こいつがはっちゃんだ」

○を描いて、その頭にぼうぼうと髪を生やす。覗き込んで、八太郎は吹きだした。

「そうそう、おいら髪が薄くて、なかなか鬢が結えなかつたんだよ」

「ちやあんと覚えてるよ」

その○のなかに「八」と記す。

「まず、おいらの父ちゃんと母ちゃんだ」

○を二つ描いて、「豆源父」「豆源母」。書き込んだところで、富次郎はふっと嫌なことを思い

出してしまった。

去年の冬、おちかと二人で聞き終えて、富次郎の身にいたく堪えてしまった話のときも、語り手の前でこうやって、出てくる人たちを書き留めたのだ。その話では、語り手一人を残して一家が全滅してしまった。

「はっちゃん。先回りして問うのも気が引けるけど、豆源さんのその出来事では、人が死ぬかい？」

八太郎が真顔に戻った。髪が薄かったこともあいまって、ガキのころはホントに大豆みたいだった。

「うちの父ちゃんが死んだよ。四十二の大厄だった」

それで終わったんだ、と言う。

「親父さんだけ？」

「うん。あとはみんな達者だった。おふくろなんか、あの世に行ったのは去年の春先だ」

「それを聞いてほっとした」

右手に筆を持ったまま、左手で羽二重大福をつかんで口にくわえて、

「お次は？」

「いちばん上の兄ちゃんと兄嫁さん」

長兄ちゃん二十四歳、兄嫁さん二十二歳。○を描いてそのなかに「長兄」「長兄嫁」。

「この夫婦に子供が二人。おいらの姪っ子と甥っ子でそのころ五つと三つだったけど、この話には小さい子供は関わりねえから、省いて」

八太郎も大福を食いながらもごもご言う。

「わあ、こりや旨いや」

「だろ？ お次をどうぞ」

「次兄ちゃん夫婦」

次兄ちゃん二十二歳、次兄嫁さん二十歳。

「この夫婦にも赤ん坊がいたけど、これまた省いちやってください」

次は長姉ちゃん二十一歳、出戻り。

「お姑さんの嫁いびりがきついつて飛び出してきちゃったんだけど、この姉ちゃん本人もきつついんだよ」

今も変わってない、と笑う。

「所帯を持った兄さんたちもみんな一つ屋根の下に住んで、豆腐屋の商いをしていたんだね」
「うん」

お次が次姉ちゃん、十九歳。次姉ちゃんと添うことが決まっていた奉公人が十八歳。

「この二人も、所帯を持って住み込みのまま、店を手伝うことになった」

○のなかに次姉、次姉許婚と記す。

「その下が三姉ちゃん、歳は十六。うちが大豆を卸してもらった問屋の手代さんと縁談話がまとまって、だからこの手代さんと三姉ちゃんはしょっちゅう行き来してた」

三姉、問屋手代ちぢめて「問手」で○。

「三男の兄ちゃんが十三歳。四女の姉ちゃんが十歳で、おいらが七つ」

二十四歳から七歳まで、八人兄弟姉妹だ。そこに女房や婿や許婚がくつついて、みんな豆源で働いて食っていたのだから、ただの子だくさんではなく、大所帯と言うべきだろう。

「おませで、当ても何から何までわかっていたっていう姉ちゃんが、はっちゃんのすぐ上の四女だね」

「うん。ちい姉って呼んでた」

富次郎は器用に羽二重大福を食べ終えて、筆を置き、温くなったお茶をがぶりと飲んだ。

「さてさて」

両手を擦り合わせると、大福の白い粉がばらばら落ちる。

「これで役者は揃ったのかな」

「あと、女中さんが一人。三十路過ぎの人だった。ご亭主に死に別れて独り身だったから、うちに住み込んでんだ」

○を描いてから、「一人なら、名前を聞いとこう」

「えっと……おこまさん」

○のなかに「こま」。猫みたいだな。

「漏れはねえな？」

富次郎が念を押すと、八太郎はじつくりと図を見回して、うなずいた。

「始まったときはこの面子だったから、今はこれでいいと思う」

胸が騒ぐじゃないか。いったい何が「始まった」のか。

ふう——と呼吸を調べて、八太郎は目を上げた。

「豆腐屋は朝が早い商いなんだ」

真冬でも真つ暗なうちから起き出して、大豆を蒸すところから始め、日が落ちるころには翌朝の分の大豆を洗って水に漬けて、一日が終わる。

「早寝早起き、ほかの商いのお店と比べたら、半日ぐらいうずれた暮らしをしてる」
水仕事だし、力仕事でもある。

「うちじゃ、台所や掃除洗濯はおこまさんに任せといて、家族は総出で豆腐屋やってた。手が空いた者から飯食って、寝て起きて、わいわい働いて、また飯食って寝る」

長兄嫁と次兄嫁には幼子や赤子の世話があるから、さらに忙しい。

「おっぱいはやれねえけど、子守だけならおいらもちい姉ちゃんもできるから、よく手伝ったもんだよ」

「うん、覚えてる。はっちゃん、赤ん坊をおんぶして手習所に連れてきたっけ」

「みんながおんぶを代わってくれたり、あやしてくれるんで助かったよ」

豆源父さんは、「うちの子はひらがなの読み書きとそろばんができればいい」「早く仕事を覚えてくれないと困る」という親だったので、八太郎の兄姉たちは、手習所には半年も通わなかった。

「おいらだけ一年近く通わせてもらったのは、母ちゃんがね」

——兄弟のうちの一人くらいは、もうちよつと学問させたい。

「そうでないと、みんなが豆腐屋のことしかわからなくなっちゃうからって」

「賢いおっかさんだねえ」

「そうかなあ。おいらはただ、手習所に行けば友達と遊べるから楽しかっただけだ」

末っ子はいいなあと、三兄ちゃんからは羨ましがられたそうだ。

「三兄ちゃんは、おいらの歳にはもう毎日豆腐の振り売りに出てたから」

振り売りは次兄もしていた。その日に商う豆腐と揚げ物をみんなで作ると、あとの店売りは母ちゃんと嫁さんたちに任せ、男たちは外へ出る。

「父ちゃんと長兄ちゃんは、料理屋とか仕出屋とか、大口のお得意さんに御用聞きに行ってた」
働きの豆腐屋一家だ。

「さて、そんで……本題なんだけど」

自分の言葉をいちいち検分するようにゆっくりと、八太郎は語りに入る。

「あの年の松の内が過ぎて、一月の半ばだったよ。そのころはおいら、三兄ちゃんとちい姉ちゃんと三人で、うちの奥の三畳間で寝てただけだね」

豆源の家の北西の角、かわや厠に近い一間だった。

富次郎は思い出してみる。

「豆源さんは広かったよね？ 板葺きの平屋で、南側がお店になってさ」

「そうそう！ 古い貸家だけど、部屋数だけは多かった」

豆源の店兼住まいは、長四角の豆腐の北西の角を一かけ切り落としたような形になっており、「その切り落としたところが、庭ってほどじゃねえけど地面が出てて、南天と柏かしわが植わってて、厠があったんだ」

外厠だったので、行き来にはそれ用の下駄を履く。

「おいら、まだおねしょ癖があったからさ。ちい姉ちゃんが夜中に起こしてくれたり、自分でも

気いつけてたりで、毎晩いっぺんは厠に行く習いになってたんだ」

「偉いねえ」

「偉かねえよ。おねしょが治らなかつたせいなんだから」

冬場や春先まだ寒いころは、外厠に行くのはすごく辛い。

「豆腐屋の真夜中は、世間様じゃ宵の口だって笑われるけど、それでも寒くって、眠気が飛んじまう」

その夜も、おしっこしたくて目が覚めて、八太郎は寝間を抜け出した。両手を擦り合わせて温め、裸足に床が冷たいからちよんちよんと跳ねるような足取りで。

「そしたらさ、家のなかのどつかで人の声がするんだよ」

世間様では宵の口でも、豆源では皆が寝静まっている時刻である。

「月夜で、おいらに明かりは要らなかつた。うちのなかも、どこにも灯は点いてない」

ぼそぼそ、ひそひそ……と話し声は続く。「男と女の声なんだ。早口で、何か揉めてるみたいな感じでさ」

夫婦喧嘩かなと、八太郎は思った。

「三組、いや次姉ちゃんと許婚も入れたら四組の男と女がいる家だもんな」

「うん。ただ、うちのみんなはほとんど口喧嘩とかしなかつた。仲が良かったっていうより、ともかく毎日忙しかったのと」

ただ一人きつつい氣質たちの長姉ちゃんを除くと、あとは気の穏やかな人たちが揃っていた。

「父ちゃんや兄ちゃんたちは口数も少なかつたしね。うちじゃ、おいらがいちばんおしゃべりだ

つた」

そう言う八太郎でさえ、手習所では騒がしい習子ではなかつた。富次郎の方がよっぽどおしゃべりだつたはずだ。

「長姉ちゃんが一人でガミガミ怒って、それをみんなではいはいって聞いて、そのうち長姉ちゃんもくたびれて黙るって感じさ」

たまに、「あたし一人だけ怒ってバカみたいだ」と長姉さんが泣くこともあったけれど、それも「はいはい」でやり過ごす。

「だからさ、夜中の夫婦喧嘩だとしたら珍しいもんで、おいら、厠から戻るとき、ついつい聞き耳たててたんだ」

それは富次郎だって同じようにする。

「ひそひそ話はまだ続いてて、何か言葉を聞き取れねえか、誰と誰なのかわからねえかって、上がり口のところδειじいとしてたら」

廊下の先——八太郎たちの寝間のさらに奥の一間の障子戸が開け閉たてされる音がして、誰かが出てきた。

「おいら、とっさに雨戸の陰に張りついて」

目だけ出して覗いていた。

「そしたら、長兄ちゃんの嫁さんが、寝間着の襟元をかき合わせながら、廊下をこう、ずっとこっちへ歩いてくるんだよ」

厠かと思つたら、違った。ただ通り過ぎて廊下へと折れて姿を消した。

「なあんだと思って」

変だぞ、と気がついた。

「長兄ちゃんたちの寝間は、家の反対側にあるんだ」

東側の六畳間に、夫婦と子供二人で寝ている。

「こんな時刻に、厠でもないのに何で家のこっち側にいたんだろう」

語る八太郎の向かい側で、富次郎は新しい半紙を出し、長四角の豆腐の北西の角を一かけ欠いた、家の見取り図を描き始めた。

「厠がここ、はっちゃんと三兄ちゃんとちい姉ちゃんの寝間がここだな」

線を引いて部屋を囲う。

「次兄夫婦と子供たちの六畳間はここ」

長四角の向かつて左側の横っ腹。

「んで、おいらたちの隣は二畳ぐらいの布団部屋でさ」

さらにその隣は、次姉ちゃんの許婚である奉公人が寝起きする狭い板の間だった。

「まだちゃんと夫婦の杯をしてなかったから、次姉ちゃんとは別に寝てたんだ」

「なら、ただ〈許婚〉じゃなしに名前をつけとこう。豆助まめすけさんでどうだ」

わかりやすいねと、八太郎はうなずく。

「今聞いたとおりだとすると、長兄嫁さんは、はっちゃんたちの隣の隣——」

布団部屋の一つ向こうの、豆助さんが寝ている板の間から出てきたことになる。

「あのね、富ちゃん」

おいらはうぶだったから。

「まず、夫婦だから一緒に寝る。まだちゃんと夫婦になったわけじゃねえうちは別々に寝る、ってことの意味からして、ぜんぜんわかってなかった」

富次郎は考えた。自分が七つのころにはわかっていたろうか。

「だからそのときも、こんな夜中に、長兄嫁さんが豆助さんに何の用があったんだろうなあって思っただけでさ」

八太郎の鼻の頭がうつすら光る。汗をかき始めているのだ。

「先を話す前に、ざっとうちの間取りを描いてくれる？」

「ほいきた」

長四角のなかに廊下を描き、廊下で仕切られた升のなかに、八太郎の説明に従って、豆源の人数を配してゆく。主人夫婦、長兄夫婦の部屋は隣り合わせ、次兄夫婦と次姉・三姉の部屋がその向かい。

「納戸や押入れの多い家だったから、唐紙を開けたらすぐ隣の座敷っていう造りじゃなかった」
「じゃあ、それもいちいち描いとこう」

主人夫婦と長兄夫婦の部屋のあいだには納戸があり、次兄夫婦と次姉・三姉の部屋のあいだには二畳の板の間が挟まれていて、ここには次兄夫婦の側からしか入れなかった。

「長姉ちゃんは？」

「いちばん店に近い、ここ」

もともとは主人夫婦、八太郎たちの両親の部屋で、たんす箆みたいに大きな仏壇も置いてあったの

だが、

「出戻りになってご先祖様に申し訳ないから、せめて仏壇の手入れはあたしがやるって長姉ちゃんが言い張ったもんだから」

八畳間・床の間付き、南西なので日当たりも風通しもよからう。

「女中のおこまさんは？」

「台所の隣の板の間」

八太郎が指さすところに、富次郎は板の間を描き込んだ。

「ここは、昼間はおいらたちが飯を食うところで、おこまさんは夜になると布団を敷いて寝るっただけだ」

これで全部だ。確かに広い家で、空いている部屋もいくつもある。

「空き部屋は、障子戸や唐紙を開けっぱなしにしていることが多かった」

「客間は？」

「そんな立派なもんはねえ。誰か来たって、店先で用が済んじまうもんね」

八太郎は手の甲で鼻の頭の汗を拭った。

「そんで……さつき話したことがあってから何日かしてさ」

暦は二月になった。

「朝早く——豆腐屋の二月の朝早くだから、夜明け前だよ。まだ真っ暗」

今度こそはっきりと男女が激しく言い争う声に、八太郎は起こされた。

「豆助さんの寝間で、次姉ちゃんが泣き叫んでるんだ。豆助さんも何か大声で言い返してるんだ

けど、やたらとおろおろ慌ててた」

何事かと、三兄、ちい姉、八太郎は寝間から出てそっちへ行ってみた。

「そしたら次姉ちゃんが床にへたりこんでて、寝間着の袖を噛んで、今にも噛み切りそうにきーきー引つ張りながら泣いてるわけさ」

驚いた顔をして、次兄嫁さんと三姉さんも自分たちの寝間からやって来た。

——朝っぱらから何を喧嘩してるのよ。

——いやあねえ、やめてよ。

「そしたら、次姉ちゃんが叫んだんだ」

見てよ見てよ、これ見てひどいひどいひどい、何てことしてくれるのよ〜！

「おいらも見ちゃった」

せんべい布団の脇に、下帯ひとつの豆助がなぜかしら正座している。その顔が赤くなったり青くなったり忙しい。

「で、同じ布団の上に——」

かい巻きをまくり上げて、寝間着の襟元を胸乳が見えそうなほど大きくくつろげ、寝乱れた鬘を撫でつけながら、長兄嫁さんがしどけなく横座りしていた。

「げ」と、富次郎は声を出した。「やっぱり、そういうことだったのかい」

家族みんなが寝静まっている真夜中、二十二歳の長兄嫁が、十八歳の奉公人豆助の寝ているところに忍んでゆくつのは、

「うん。そういうことだったんだ」

その朝、次姉がその場を見つけたのは、

「おいらのときと同じ。次姉ちゃん、目が覚めて厠に行ったら人の声が聞こえてきて」

——豆助さんの声だ。

「耳を澄ませてみたら、あら長兄嫁さんの声もする」

いったいぜんたいどうしたのよと、部屋に踏み込んでみたら、二人がかい巻きにくるまっぴいちゃいちゃしていた、と。

「次姉ちゃんの顔を見たたん、豆助さんはわっと起き上がって長兄嫁さんから離れてどどどつと言いついて謝って」

しかし次姉は狂乱の叫びが止まらない。

「長兄嫁さんは全然悪びれてなくってさ。何か、てろりゝんて薄笑いしてるんだ」

そういうのはたぶん、「艶然と笑う」と表すればいいのだろうが、「てろりゝん」も言い得て妙である。

「豆助さんの言い訳は？」

富次郎が聞くと、八太郎はちよつと息を止めてから、どうつとぶちまけた。

「こんなのは何かの間違いだ夢だおれはそんな気はなかった若おかみが布団に入ってきて誘うもんだからでもおれは何もしてねえすみませんごめんさいわるい夢ですよ」

申し訳ないが、富次郎は笑ってしまう。八太郎も嘔き出した。

「そのへんで、おいらは三兄ちゃんに首つたまつかまれて遠ざけられちまつたんだけど」
でも、騒動は始まつたばかり。

「長兄ちゃんがその場に来てからの方が大変だったらしいよ」

そりゃ当たり前だ。

「修羅場だね」

しかし、夫である長兄が色を失って取り乱そうが、舅しゅうとめ姑しゅうとめの驚きと嫌悪の顔を見ようが、長兄嫁さんは「てろりゝん」のまんま。

「それどころか、みんなの前で、まだ豆助さんに迫ろうとしたんだって」

ついに、豆源父がその顔を平手で打った。

「鼻血が出たっていうから、すごい力で引っぱいたんだろっね」

その一撃で、長兄嫁はやつと正気に戻った。まさしく憑つきものが落ちたかのようで、あられもない自分の姿を見おろし、まわりの家族の顔を見回し、さっきまでの次姉よりも甲高い悲鳴をあげたかと思うと、ぶつりと気を失ってしまった。

「そのまんま昼過ぎまで死んだように眠って、次に目を覚ましたときには、今朝方の出来事をきれいに忘れちまつてたんだ」

富次郎は自分で描いた豆源の間取り図に目を落とし、胸の前で腕を組んだ。

「それ、嘘や芝居じゃないんだよな？」

八太郎は、顎あごの先を胸につけるようにしてうなずいた。

「ホントに忘れてた——忘れてしまったようにしか見えなかったって」

「そのへんの話は」

「ちい姉ちゃんが聞かせてくれたんだ。この最初の騒動だけじゃなく、全部の厄介事が終わるま

で、おいらが何か尋ねられるのも、おいらに何かを説明してくれるのも、ちい姉ちゃん一人だけだった」

言って、八太郎は思い出し笑いをした。

「十三の三兄ちゃんより、十のちい姉ちゃんの方が、この件についてはわかっている感じだったよ」

「女は怖いねえ」

「違う違う。男は女にはかなわねえんだよ、富ちゃん」

おっと。この台詞は、女房をもらうどころか、ぶらぶらすねかじり米食い虫の富次郎の胸にはまだ実感が無い。

「長兄嫁さんは忘れてる。つまり、自分がそんなことをしたって責められても、これっぽっちも身に覚えがねえ」

本人には恐ろしい事態である。悲しいしおっかないしわけがわからない。亭主も舅姑もおかしくなってるんじゃないか。

「それとも、こんなとんでもない難癖をつけて、自分を豆源から追い出そうとしてるんじゃないのか」

——あたしはそんな女じゃありません。やってもいない不貞を責められて認めるくらいなら、首をくくって死にます！

「豆助さんに向かっても、あんたあたしに何の恨みがあってこんな嘘八百を言うんだ、気持ちが悪い、おぞましいって叫んでさあ」

その大真面目な怒りっぷり嘆きっぷりが、今朝の「てろり〜ん」を目の当たりにしている者たちには、なおさらおっかない。

「そういうやりとりのあいだ、次姉ちゃんは どうしてたんだい」

「そっちもそっちで大変だった」

しゃにむに長兄嫁さんに飛びかかっているところなので、その場からは引き離し、姑である豆源母さんと次兄嫁さんの二人がかりで見張りつつ、一生懸命宥めていたという。

「ほっといたら、長兄嫁さんの目玉をえぐり出しちまうところだったからね」

「三姉ちゃんは？」

「こんなことで揉めてるところにいたくないって、許婚の手代さんのいる大豆問屋へ逃げてっちゃった」

余計なことをしゃべるなよ！ と、豆源父さんに釘を刺されていたそうなの。

「十四年前の二月だよな？ おいら思い出してみてるんだけど……」

富次郎は記憶をたぐり寄せる。

「うちのおっかさんが、珍しく豆源さんが商いを休んでるって言った日があったような、なかったような」

「うん、その日だ」八太郎はほんと手を打つ。「店を開けられなかったのは、あの日だけだったもん」

「朝の味噌汁に豆腐も揚げも入ってなくて、菜っ葉の切れっ端だけだったから、おいらも覚えてるんだ」

思えば、子供のころから食べ物にはうるさかった富次郎である。

「長兄ちゃんが大泣きしながらげえ吐いちゃって、どうやっても収まらないんだよ。そんなんで豆腐を作るのはいけないから、思い切って店を休んじゃったんだ」

二人の子をなした女房のとんでもない「てろり〜ん」不貞に、夫である長兄は怒るよりも心が壊れてしまったわけである。

「長兄さん、優しい人なんだね」

「というより気が弱い」

八太郎はけろっと言った。「長兄嫁さんに惚れてたしね。身内のおいらが言うのもなんだけど、長兄嫁さんは美人だったから」

家のなかで起きた男女の不始末、堅苦しく言うなら不義密通だが、女の方は「身に覚えがない」と泣くばかり、男の方は不始末を認めた上で、奉公人の立場だから平謝りして小さくなるばかり。

「普通なら、たちまち豆助さんをうちから叩き出すもんだろうけど」

厄介なことに、豆助さんは次姉ちゃんの婿になる男なのである。

「それに豆助さんは、ずっと言ってた」

——若おかみの方から寝間に来たんです。誘われたのはこれが最初じゃなくって、先にも何度かありました。

「そのたんびに必死に断って追い返してたんだけど、昨夜はとうとう押し切られちゃったっていうんだよね」

美人の若おかみだからなあ。女は子供を一人か二人産んだあとがいちばん美しく、色気もあるというし。

「それ聞いて、次姉ちゃんはもつと怒って」

——義姉さんを離縁してよ！

しかし長兄さんは、泣いたり吐いたりしつつも女房の言い分を聞き入れて、その肩を持った。

子供もいるんだし、あっさり離縁なんかできるもんかと、次姉を叱りつける。次姉は怒り狂って、今度は長兄の顔を引つ掻き目玉をえぐり出そうとする、と。

「阿鼻叫喚だね。そりゃあ店を開けるところじゃなかったわな」

「おいらとちい姉ちゃんは、一日じゅう子守ばかりしてたよ」

今だからこうして話せるが、

「あの日はろくすっぽ飯も食わなかった。こういうのも災難だよねえ」
立派な災い、恐ろしい禍事だ。

「普段は気の穏やかな人たちが揃ってる家のなかじゃ、なおさらだよ」

一同、こんな椿事をどう解決すればいいのかわからなかったことだろう。

「結局、うちの差配さんに来てもらってね」

地主・家主に仕える土地の差配は、店子にとって頼りになる相談相手でもある。

「とりあえず、豆助さんを預かってもらうことになったんだ」
もちろん、豆源の仕事も休ませる。

「差配さんは、あのころでもう干からびたじいちゃんだったけど——」